
散るが花

積銀

注意事項

このPDFファイルは小説サイト「小説家になろう」で掲載中の小説を、「PDF小説ネット」の変換システムが自動的にPDF化したものです。この小説の著作権は作者にあり、作者または「小説家になろう」および「PDF小説ネット」を運営するウメ研究所に無断でこのPDFファイルおよび小説を引用を超える範囲で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止します。小説の紹介や個人用途での印刷および個人用途での保存はご自由にどうぞ。

【小説名】

散るが花

【コード】

N1782C

【作者名】

積銀

【あらすじ】

散るからこそ花なのだと言はれど、もう咲かないあの方のことを思い出すと、私はどうしても悲しく思ってしまうのです。…
…全ての花は冬には散っていく。その季節に終わる、一つのラブストーリー。

— 真の闇では、人間の目には何も映らない。そこで活動出来るのは、幽鬼の類だけである。

「殿、着きまして御座います」

大松を掲げた従者が牛車の中の主人に声をかける。主人は、小さな声で「ああ」と答えると、牛車の簾をゆつくりと上に持ち上げた。秋の外気は少し寒く、もうすぐそこに冬が訪れているのを予感させる。吐く息こそまだ白くはないが、吹く風の肌寒さは日に日に増していた。

この男、名を藤原時久ふじわらのときひさという。大納言を父に持ち、自身も頭弁であり、周囲から注目される人物であった。しかしどういいうわけか、元服してから齡二十三になった今の今まで、浮いた噂が全く立たないので、それが世間では話の種になっている。「頭弁殿は堅物で、女には全く興味がないのだよ」と、影で嘲る者もいた。

しかし実際は、その時久にも、人知れず想いをかけた姫があった。……今宵も桜が美しく咲いているな」

時久は独りごち、中門に止められた牛車から渡廊下に降り立った。月に照らされた桜は、冴え冴えと輝き、この世のものとは思えぬような、透けるような美しすぎる白であった。

「時久様、お待ち申し上げておりました」

いつから居たのか、時久の横には、灯りを手にした女房が一人。無表情な白い顔で立っている。闇に照らし出されたその顔は、まるで幽鬼のように美しく、恐ろしい雰囲気醸し出していた。

「ああ、藤殿ふじ。お加減は如何だ」

「あい、相変わらずで御座います。ささ、姫がお待ちかねです。どうぞ」

藤と呼ばれたその女房は、にこりとも笑わずに時久を促す。

「そなた達はそこで待っていないさい」

「はい」

従者達にそう言うと、時久は藤の後に続いた。暗闇の中に、彼の黒い直衣が溶けるように消えていった。

静寂に包まれたこの屋敷には、藤の他に、楓かえでと呼ばれる女房と、梅鬼うめきという女童、そして主人である姫君しか住んでいない。四人で住まうには大きすぎる屋敷である。しかしどういわけか、常に細部まで掃除や装飾が行き届いており、いつ来ても落ち度は全くない。そして、何よりも一番不思議な事は、いつ来ても桜が素晴らしい花を付けている事であった。真っ白な花弁は常に舞い散っている。しかし花は少しも減らずに咲いているのである。

「この桜は、いつ来ても儂げに咲いている。どなたが手入れをしているのだ」

時久の質問に答えようとはせず、藤は無言のまま、足早に姫君のもとへと導いていく。まるで、外界と隔絶されてしまったような空気が二人を包んでいた。

ふと、ある部屋の縁側で藤が足を止めた。彼女の持つ灯りに照らされ、簾の内側に姫君の姿が仄かに映し出されていた。薄桃色の唐衣に影が揺れる。

「姫様、時久様をお連れ申し上げました」

「あい。有り難う、藤」

鈴の音のような澄んだ声が言うと、藤は闇に溶けていくように姿を消した。

時久がぼうつとして藤が溶けていった闇を眺めていると、簾の内側からクスクスと含み笑う声が聞こえてきた。時久はハツとして、簾を挟んで姫君の前へ腰を下ろす。

「何故笑ってらっしゃるのです」

「ふふ。時久様がとてもぼうつとなさっているので、また藤に怒られたのかと思って」

「今夜は屋敷内を勝手に歩いたりはしていませんし、あの桜を一枝折ろうともしていないですよ」

時久は少し恥ずかしそうに笑った。

「藤って、わたくしにも容赦なく怒りますのよ」

「桜の君。貴方も藤殿に怒られたりするのですか」

時久は、意外だなあ、と言いながら、楽しそうに身を乗り出した。「ええ。先日は、雨が降っていて、その雨風が気持ち良いので縁側に出ていたのです。そうしたら藤が血相を変えて」

「『まあまあ姫様！ そのような所にお出ましになられては、お身体が濡れてしまいますよ！』とか？」

時久は声をわざと裏返し、藤の真似をした。

「まあ、よくわかりになりましたね」

姫君が驚いて両手を頬に添えた。しかし、すぐに二人で笑い出す。鈴が鳴るような可愛らしい姫君の声に、時久は更に相好を崩した。

簾の中の姫君にいざり寄り、時久は優しく微笑む。すると、姫君の気配が、それにつられたように微笑み返すのがわかった。

「姫。私が初めて貴方にお会いした日を、覚えておいでか」

時久が問うと簾の内の姫がこくりと頷いた。

時久が桜の君と出会ったのは、この年の春の事だった。

ある日、時久は宮中の用事が滞っていたため、それを終え、夜半帰路についた。

春霞のせいで、おぼろな月の光が辺りの風景を幻想的に見せている。霞む風景、おぼろな屋敷の壁、行く先が見えない道……牛車がどこの道を通っているのか、時久はわからなくなっていた。

牛車の窓からふと外を覗くと、月光に照らされた美しい桜の花が目に入った。雪を欺く色で咲く桜である。

どなたのお屋敷であろう。時久はそう思いながらぼんやりとその桜を眺めていた。

その時、屋敷の中から微かな琴の音が聞こえてきた。耳を澄ませ

て聞いてみれば、今までに聞いた事のない、美しい旋律である。時久は従者に車を止めさせ、暫しの間その旋律に酔いしれた。甘美で優雅で、そして哀切な不思議な曲であった。

誰が弾いているのか、時久はその人物の姿を見たいと思い、屋敷の中を垣間見た。すると、庇に小さく光る白い影が見える。おぼろな月の光と霞のせいで、輪郭がはっきりしない。

時久は更に牛車を屋敷に近付けさせ、その影に目を凝らした。

「桜の……精？」

それは、簾の内から出て、庇で月の光を浴びながら琴を奏でる、白く儂い、少女のような姫であった。

「私が貴方を初めて見た時、本当に桜の精霊が琴を弾いているのかと思っただけですよ」

時久は徐に簾を手で持ち上げ、内側の姫君にいざり寄った。遮る物がなくなり、姫君の白い頬が月に照らされ、匂い立つように美しく輝いている。例えて言えば、あの桜の花のように。

「桜の君、今宵は二人で庇に出て、あの月を愛でませんか？」

「はい……」

小柄な姫君の体を抱き上げ、時久は庇へと出た。

月と花と、そしてこの姫君。優劣など付けられない程、この世のものとも思われない程、全てが美しく儂かった。

二

宮中。

時久は仕事に追われ、丸四日宮中に閉じこめられていた。

「頭弁殿、どうなされました。浮かぬ顔を見せて」

右近という顔馴染みの女房に声をかけられたが、時久は心ここにあらずといった様子で、生返事をしただけで去ってしまった。

最後にかの姫君のもとへ行ってから既に六日が過ぎている。顔が

出せない代わりに何度か文を贈った。しかし、昨晚出した文の返事が未だに返ってこないのだった。いつもならば、美しい花を添えた文がすぐに返されてくるのに、今回はこない。既に日が陰り始め、文を送ってから一日が経とうとしている。

時久は焦燥に駆られた。どうかしたのだろうか。姫君の身に何か起きたのだろうか。そう考えると、そわそわと落ち着かず、居ても立ってもいられなくなってしまふ。

「時久、どうした。右近が心配していたぞ」

とある部屋で書き物をしていると、時久の友人である橘春人たちばなのはるひとが、後ろから大声でそう言った。

「今日は朝から機嫌が悪そうだな」

「……うん」

沈みきつた友人を目の前にして苦笑し、春人はそのまま時久の横に腰を下ろした。

頬杖をついたままため息をついた時久の横顔が、憂いを帯びて艶めかしく見えた。春人は心の中で、ははあ、さては……と呟く。

「時久、さてはお前、懸想したな」

「え！」

裏返つた時久の間抜けな声が部屋中にこだまし、そのまま廊下へも響き渡つた。廊下を歩いていたら女房が、驚いて足を止めたくらいである。まるで動揺を隠そうとしない時久の反応が余程面白かつたのか、春人は苦しそうに腹を抱えている。

「凶星か」

春人はにやにやと嬉しそうに笑うと、時久に詰め寄つた。

「相手は誰だ？ その様子だと、叶わぬ恋かな。まさかお前、右大臣殿の所の嘉子姫に懸想したか。先日、俺も垣間見してきたのだが、あの方はとても美しかったなあ。だが、あの方はもうすぐ入内なさる。帝の奥方に手を出したら、とんでもない事になるぞ。あ、それとも、内大臣の姫の綾子殿に心奪わ」

「春人は飛躍しすぎだ！」

「ははは、悪い悪い」

春人は全く悪いと思っておらぬ表情。人の事情に首を突っ込むのが大好きで、しかも散々引つ掻き回したとて責任は取らぬ。時久はうんざりしているが、春人のそういう性格が嫌いではない。

「で、誰なんだ」

「……お前に言ったところで、どうにもならん」

「冷たい奴だな。教える。俺だって、親友のお前が心を懸けた姫の名くらい、知っておきたい」

不意に真面目な顔つきになる春人に、時久は気圧された。こういう時、春人という男はつくづくずるい、と時久は思う。

「……名は知らぬのだ」

「名を知らぬ？」

「ああ。俺は『桜の君』とお呼びしているが」

「……いずれのお屋敷の姫なのだ」

「……」

時久が言葉を詰まらせ、顔を背けると、二人の会話は途切れた。

春人は何か考え込んでいるように腕を組み、複雑な表情で眉間に皺を寄せている。不機嫌なのか、呆れているのか、それとも怒っているのか、何とも複雑な顔つきである。

時久も同様に眉をひそめていた。

「……実は、今まで何度も彼女のもとへ通っていたのだ」

妙に弱々しく時久が言うと、春人はパツと顔色を変化させた。

「なん……だ。もう成就していたのか。心配して損したぞ」

春人はそう言うと、力が抜けたようにごろんと横になった。この春人という男は、宮中にあってもこのような不作法な行動を平気でする。

「で、その姫君は美しい方なのか？」

「そ、そりゃあもう……美しくて、お優しくて、上品で……」

「そうか、そうか！」

恥ずかしそうに赤い顔をして言う時久を、春人は楽しそうに見て

いる。その顔は、からかっているというより、子どもを見守る父親のような表情である。

「まるで、桜の精のようなお方なのだ」

「ああ、だから『桜の君』なのか」

時久はこくりと頷いた。

「……だが、昨晚出した文の返事が、まだ返らないのだ」

「それで、あんなに不機嫌な顔をしていたわけか」

「……」

春人は満足そうに微笑むと、起き上がり、時久の肩を二度叩いた。そして何故かわざと大きなため息を吐くので、時久は訝しそうに彼を見つめた。

「お前は、女について、まだまだよくわかっておらんな」

得意気な春人の顔を眺め遣り、時久は不機嫌そうに唇を尖らせる。

「……そりゃあ、お前のようにには女性経験は豊富じゃない」

「はは、そう怒るな」

「ふん」

馬鹿にされた気分になり、時久はそれまで以上に不機嫌な顔色である。それとは正反対に、春人は楽しそうに笑っていた。

「お前が最後にその姫の所へ行ったのはいつなのだ」

「……六日前だ」

「だったら話は早い」

春人は急になよなよとした手つきで自分の目を覆い、さめざめと泣く真似をした。

「時久様ったら、六日間もわたくしを放っておくの。きっと他に懸想した姫がいるのよ。あな悲しや、あな悔しやあ」

気味の悪い裏声で女の真似を始めた春人を、時久はただ呆然と眺めている。そんなことはお構いなし、春人は続ける。

「だから、文が来てもすぐには返事をしてあげないの。焦らしてやるんだから！」

「は、春人。気味が悪い……」

時久がそう言うか言わないかの時、廊下を歩き過ぎる女房達が、小さくクスクスと笑いながら、彼らの様子を盗み見ていった。やはり女房に笑われた事は恥ずかしかつたらしく、春人は仄かに顔を紅くして苦笑しながら、自分の膝をポンと叩いた。

「だからさ、姫はお前を焦らそうとしているのさ。今夜辺り行つてやれよ」

「だが、まだ仕事が終わら」

「そんな事は気にするな、俺が代わってやる！ お前は少々真面目過ぎていかん」

物凄い剣幕でそう言うと、春人は時久にすぐ支度をするよう促した。こうと決めた春人は恐ろしく手際が良い。途端に女房達を集め、時久の身だしなみを整えさせ、家臣に事情を話して彼を送り出してしまった。時久は小さく、

「有り難う」

と呟いた。

もう外は寒く、冬に入っているような空気が漂っていた。

三

夜半。

時久を乗せた牛車は、ゆっくりと小路を進んでいく。ごとごとと揺られながら、時久は焦燥感に襲われていた。

春人はああ言っていたが、以前にも五、六日顔を出せなかった事が何度かあったのだ。その時も時久はこまめに文を贈り、その都度すぐに姫君から返歌がきていた。今回に限って、姫君が自分を焦らそうとしているとは、時久はどうしても思えなかった。

しかし、悲観的に考えても、どうにもなるまい。時久は何とか自分の不安を抑えようと、春人の明るい顔を思い出した。

（そうだ。春人の言うように、桜の君は焦らそうとしているのだろ

う。俺を少しからかおうと思っておられるのかも知れん……）
そんなふうには、何とか自分を明るく思考に持っていこうとしてい
ると、程なくして牛車ごとりと止まった。

「時久様」

時久は、屋敷にたどり着いたので呼ばれたのだと思った。しかし、
従者の声色が尋常でない事に気付き、簾を荒々しくかきやり、外を
見た。

「何事だ」

「さ、桜が全て……散っております」

従者は、まるでこの世の物ではないあやかしを見たように、唇を
蒼くしていた。時久が慌てて屋敷の庭に見える桜の木を見やると、
果たして、その者の言った通りに花が全て散っていた。

「姫」

時久は牛車から飛び降り、屋敷に入ってしまった。

灯りはない。真の闇である。

真の闇では、人間の目には何も映らない。そこで活動出来るのは、
幽鬼の類だけである。

それでも時久は、暗闇の屋敷の中で、姫の姿を探した。壁に肩が
ぶつかり、柱に袖を持っていかれそうになりながら、時久は走った。

「姫」

返事はない。

いつもであれば、時久が屋敷に入ると必ずどこからともなく現れ
る藤の姿も、今宵はない。

「姫!」

欠けた月の弱い光に照らされる渡廊下に出ると、いつもとは違う、
悲愴な雰囲気が漂っていた。

ふと時久が廊下の端に目をやると、小さな薄紫の花が落ちていた。
それは、枯れかけた一房の藤だった。

「藤……殿」

絞り出すような声で呟き、時久はその藤の花を静かに優しく拾い上げ、懐に押し付けて目をかたく閉じた。

頭の中にくるぐると廻る恐ろしい想像が、彼を襲う。考えたくない事が、際限なく膨張していった。

姫君の身に何が起きたのか、わからない。しかし、何かが……。

「時久……様……？」

不意に、弱々しく時久を呼ぶ声が響いた。

「姫？」

「時久様、何故……」

弱々しく横たわる桜の君が、消えかけた灯火に照らされて闇の中に仄白く浮かび上がっている。

時久は無我夢中で走り寄り、彼女の体を抱き寄せた。

「何が、何が、起きたのだ」

桜の君の体は氷のように冷え切って、唇は肌とほとんど変わらぬ程白くなっていた。その様子に激しく動揺した時久は、気が動転して上手く言葉が出てこなかった。

「時久様。ごめんなさい……」

「姫」

桜の君の手を握り締め、時久は悲壮な表情を更に曇らせた。止まってしまうのではないかと思う程、心臓が激しく波打っている。

「わたくし、もう咲いてはられないの……」

握られた手を握り返し、姫君は寂しそうに微笑んだ。

「姫、貴方は、やはり」

月の細い光が庇に降り注いでいる。その輝きが涙のように二人の頬に流れていた。

姫君は手を伸ばして時久の冷えた頬に触れ、微笑。

「春、時久様が桜を見ておっしゃったお言葉、わたくし今も覚えて

おります」

「私も覚えているよ」

時久の目は既に濡れていた。涙がこぼれ落ちる一つ手前だった。

「時久様はこうおっしやつたのですわ。桜は散るのが一番美しいと思っていたけれど、この桜はこの咲き誇る姿が何よりも雅で美しい」と

「ああ」

「わたくし、とても、嬉しかった」

「ああ、ああ」

何度も何度も頷き、時久は自分の頬に触れる彼女の手を握り締める。

「ですが、やはり……冬に桜は、似合いませんね……」

突然冷気が吹き込み、二人の顔に白い花弁のような物が流れてきた。それは、真白い雪であった。

それを見ると、姫君は苦悶の表情の中に笑みを浮かべ、一筋の涙を流した。

「やはり……桜は……散るのが自然……なのです……ね」

彼女の声が途切れた途端、強い風が横殴りに吹き付け、時久は思わず目を瞑った。

次に目を開けた時には、時久の膝や袖、そして床に、真白い桜の花弁が散らばっていた……。

四

頭弁藤原時久が宮中に参内しない日が、かれこれ七日続いた。

馴染みの者達は彼を心配し、病にかかったのだと言いつつに祈った。特に、彼を話し相手として気に入っていた女御や、好意を寄せていた女房達の中には、私的に法師に祈祷させる者までいたという。

橘春人は、参内しない親友の様子を伺うため、連絡せずに屋敷へと向かった。

「時久はいるか。春人が来たと伝えてくれ」

時久の従者達にそう伝えたと、彼らは首を横に振る。

「居ない？ どこへ行った」

「桜の君のお屋敷へ」

「想い人の屋敷か。そうか、今宵は愛しの姫君の許へ……」

「……………」

従者達は皆、目を伏せがちにして俯いていた。誰一人として、春人と目を合わせようとはしない。

「……………どうかしたのか？」

彼らの様子がおかしい事に気付き、春人は怪訝そうに眉をひそめた。

「何が起きた」

「……………」

「言え」

「……………」

落ち着いているくせ、凄味のきいた迫力のある春人の声に、従者達も困惑した。暫くは誰一人口を開かなかった。春人は鋭い目で彼らを見つめている。

どれ程、そうして黙っていたであろうか。ある男が、とうとう口を割った。

「それが、その……………桜の君が、亡くなられ……………」

「……………亡くなられた？」

思わぬ答えに、春人は目を丸くした。

否、予想しないではなかったのだ。あの真面目を絵に書いたような男である時久が、宮中に出てこないなど、尋常な事ではないと春人も思っていたのだ。もしか、姫君の身に何かあったのか、と案じていたのだが、的中してしまった。

「……………心配だな。誰ぞ、俺をその屋敷に連れて行ってくれないか」

澄んだ空には既に月が浮かび、下界に冷たい光を放っている。まだ満月にはならない、欠けた月である。

屋敷の外は身を切るような冷たい空気に支配され、吐く息は白い。その白い息が端から端から大気に散布していく。

時久は草木の枯れ果てた庭に一人佇んでいた。

「時久」

呼ばれて振り返ると、そこには春人の姿があった。春人は、時久よりも悲愴な表情を浮かべていた。

「春人……」

さほど驚いた様子も見せず、時久は虚ろな瞳で春人を見た。

「時久、どうしたんだ。皆が心配している。お前の身に何か起きたのかと」

「……すまない」

時久は俯き、目を閉じた。

時久は墨染の衣の裾を、両手で捲り上げていた。春人はそれを指さした。

「何だ、それは」

時久は少しだけ、その裾を開く。

裾の中には、白い花弁が入っていた。

「……桜か？」

「うん」

小さく吹き始めた風に煽られ、一、二の花弁が舞った。まるで、雪。

「桜の君は……」

その桜の花弁を見つめ、時久は青白くなつた唇を小さく動かした。

悲痛な瞳で咳く時久を見るに耐えきれなくなり、春人は小さく相槌を打つただけで顔を背けた。時久も、一言咳いただけで、口を閉ざした。

段々と強くなつていく風に煽られた雲が、月を隠していく。だが、不思議と辺りは明るかった。

時久は、衣の裾を大きく広げた。

ひらひら。

花弁が風に舞い上げられ、天へと登っていく。さながら真白い雪のように輝き、風に誘われ、空気に溶けていく。

「人の魂は、死して七日の間は、まだこの世に留まっていて、そしてあの世へ旅立っていくのだという」

舞い上がった白い花弁を見つめ、時久は誰に言うでもなく囁いた。

「きつと彼女の魂も、今夜、天へと」

白く美しい桜の花弁は、時久の視線の届かぬ方へと流れ、消えていく。

全ての花弁が消えていくのを、時久と春人はずっと眺めていた。

月の消えた不思議な明るい空から、小さな白い結晶が舞い散ってきた。

雪であった。

「春人」

時久は、雪の降る空を眺めながら、春人を呼んだ。

「何だ」

「桜の君は、まことに桜の精であったよ」

「そうだったか」

「あの方は美しく咲いていたよ。春も夏も秋も」

「そうか」

「俺のために……」

「……」

空から視線を下ろし、春人の顔を見た時久の目は、赤く腫れていた。

「俺のために、これから咲くはずであった全ての季節を 命を削

つて……あの方は咲いていたよ……」

春人の肩に顔を押し付け、時久は声を上げて泣いた。

空から降る雪は、失われたあの桜のように白かった。

散るが花と人は言へども吾憂ふ

散るが花

了

絶えて咲かざる君をおもへば……

(後書き)

以前より平安時代を舞台としたお話を書いてみたかったです。：
：が、時代考証など大分無視したり怪しい部分がございます(汗)
ご了承ください。

散るが花

広告募集中

小説関連広告に最適です。
出版社や印刷会社はもちろん、
個人の広告でもOK

縦：140mm 横：110mm

詳しくは PDF 小説ネット広告募集をご覧ください。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネットは2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1782c/>

散るが花

2009年3月24日09時27分発行